

園長にのぞむもの

私は国立大学付属幼稚園の教諭です。十二年間勤続の間に三代の園長先生につかえました。「園長に望むもの」といわれましても、私はちょっととまどうのです。そのものずばりと出てきません。今の園長先生に教諭の立場として、こうあって欲しいと思うもの、それはいろいろあるでしょうが望んでみたところで、現在の制度上ではどうにもならないことです。そこでそれ以前の問題にふれてみたいと思います。

私も若い頃はよく若輩が寄ると園長や主任の先生の悪口をいったり、理想をしゃべっては自分を慰めたり、新しい活力を得たような記憶を持っています。しかし現在ではそれ程単純に考えないようになりました。それもそのはずです。自分が悪口をいわれる立場になりましたから、むしろ園長先生に同情して同じ立場で物考えるようになりました。

十二年間の付属幼稚園生活を通して感じとった、

「園長はこうあってほしい。」と思う理想論

とても申しましようか、特に付属幼稚園長を付属教官としての立場から考えてみますと、一、専任園長であること。

国立の付属幼稚園長は大学の教授が併任するようになっていくようです。これは付属学校の使命達成の上から、非常によいことだと思います。ただし、当園の場合は幼幼・小・中・校長兼務になっていきます。全国を見渡した場合もこういう所が多いようです。

園長、校長の職務規定があって、本当にそれに忠実であるためには、三つの種類の異った学校の長を兼ねるといことは到底考えられません。このような現状を進めてゆくことは最も抵抗の弱い幼稚園にしわよせがくる結果となり、ひいては幼稚園教育の推進をはばむものとなります。今問題になっている管理職手当でも出るようになれば財政的にも影響をしてきます。けれども、園長手当も何も無い現状では専任、兼任の別は財政的には何の影響も無いと思います。

二、子どもに出来るだけ接触の機会を作つていただきたい。

これは、むしろ私の方に責任があるかもしませんが、年に、二、三回の式にお話をさせていただくだけでも子どもは非常に園長先生

を歓迎します。三回が五回になり、五回が七回になるだけでも、園長先生と子どもたちの人間関係はすばらしく発展するだろうと思います。

三、先生たちと出来るだけ接触の機会を作つていただきたい。

これも私の方に大分責任があるように思いますが、現状では、私のがつびきならぬ用件の相談や報告を持って何回か足を運んでやると話し合いの出来るのが週に二、三回ぐらいとすると他の先生たちは月に一回ぐらいしか無いでしょうか。接触を重ねることによって心が通うような気がいたします。三人の園長先生がそれぞれ専門の学問を背景にした教育的識見を持っておられます。それが、一人ひとりの教師の教育観とか児童観の上に反映してゆくためには、どうしても個々の教師を指導していただけるような機会をたびたび持つことが必要だと思います。

教師の腰が浮いていては本当の教育は出来ません。いろいろな使命を持った付属幼稚園の教師がじゅうぶんな教育効果をあげるために、園長先生が積極的に一人ひとりの教師に接触の機会を作つていただきたいと思うわけです。